

身体のメレオロジー：ライプニッツとインワーゲン

神戸大学 松田 毅

1. 「メレオロジーとオントロジー——歴史的分析和現代的探究」の射程から

最初に「身体のメレオロジー：ライプニッツとインワーゲン」という唐突に響く主題の意図を述べる。表題の共同研究では「部分と全体」に関連する存在論的研究と討議を行ったが、その結果、浮上した争点が、「心」や「生命」（「心的生命」と総称）を広い意味の「メレオロジー」——公理系として構成される論理学としての「一般外延メレオロジー GEM」だけに限定されない部分・全体関係の理論——の観点でどう特徴づけるかであった。

実際、アリストテレスとスコラ的哲学と近現代の科学、科学哲学とのあいだには深い亀裂がある。そして、当然ながら、近世以降の「心的生命」に関する哲学の基礎にあるのは、アリストテレスのいわゆる質料形相図式や中世の陰を帯びた「実体形相」などではなく、それを否定し、取って代わった原子・粒子論そしてある全体を「部分の和」として法則的に説明する「機械論」の哲学であった。そこでは何らかの基礎的・物理的存在者を部分とし、部分から合成される全体として「心的生命」の存在を特徴づけることが目指された。この点をどう評価するかが、『物質的存在』（*Material Beings*.1990）の著者、分析的形而上学の代表のひとり、ヴァン・インワーゲン（Inwagen, v. P、インワーゲンと略）の場合にも問題となる。

この合成の問題の解決策として「生命（生物）」を持ち出すインヴァーゲンは、サイダーの『四次元主義の哲学』の主たる論争相手のひとりとして位置づけられている。本発表ではインヴァーゲンの『物質的存在』の「生命」概念がどのような哲学的理路と歴史的位位置をもつかを確認し、その固有の「メレオロジー」に注目する。インヴァーゲンも、基本的には現代科学の土俵に立つが、「生命」、特にその「活動性」を粒子論と機械論の枠組みに収まりきらないものとして位置づける点が特に問題となる。同じ問題が、ロックの場合にもライプニッツの場合にもあった。

「どのような条件のもとであるものは何かの部分となるのか」というインヴァーゲンの「特殊合成問題」に関連する「普遍主義」の論駁あるいは「無制限の合成（融合）」の原理の制限に関する議論は、「生命」の固有の位置づけの論証に関わること、また同じ論点が、存在論的にはD・ルイスの「ヒュームの付随性」——「世界に有るものは、すべて個別事実からなるローカルなもの、夥しい数のモザイクである」として、粒子論と折り合いのよい原理——に対するアンチテーゼとして現れる点を確認する。

2. ライプニッツの「実体形相」対ロックの「生命」

このように、「生命」をめぐる広義の「メレオロジー」の観点から現代形而上学と近世形而上学とを繋げて考えよう、というのが発表者の企図である。実際、形而上学の歴史にはこの問題をめぐる格闘の痕跡が残っており、ライプニッツとインヴァーゲンを繋ぐ線もそこに見いだされる。ライプニッツは、アリストテレスの伝統にも学びながら、部分・全体関係の多様な構造上の違いを浮き彫りにすることを通じ、「心的生命」に独自の存在論的身分を与えたが、実は『物質的存在』には、ライプニッツとの関係が直に言及される箇所があり、それがこの考察の哲学的な詮索の手引きとなる。

インヴァーゲンは、ロックの『人間知性論』（初版 1690 年）の「生命」概念を参照し、アリストテレスの「実体」解釈が自分の見解に一番近いと述べる際¹、ライプニッツの結論には同意しないものの、1686 年 11 月 28 日/12 月 8 日のアルノー宛書簡での問題設定、議論の整理は見事であると評価した上で、物質的存在の部分からの合成問題を取り上げている。インヴァーゲン自身はこのような哲学史を背景としながら、「接触 contact」「結合 fastening」「凝集 cohesion」「融合 fusion」と「ニヒリズム」「普遍主義 universalism」の合成の六つの原則をすべて退けた後、「ものの持続的同一性」の説明のために「生命」を持ち出す。

インヴァーゲンが指示する『人間知性論』第 2 巻 27 章第 4 項のロックは、原子の塊である限りの物体の同一性については、そのあらゆる部分の同一性を条件とする「メレオロジカルな本質主義」とも言える立場を表明する一方で、生物の場合は、同じ分子の塊ではなく、同一性は「他のある事物に基づく」と述べる。一本のオークは、その部分が変化しても、個体としての同一性があり、物質の塊はなんらかの仕方で合一された物質分子の集合にすぎないが、「オークは、物質分子がオークの諸部分を組織するように配置され、それら諸部分は養分を摂取し配分して、オークの木質や樹皮や葉などを継続し形成するのに適当な体制を作っていて、ここに草木の生命が存する」とし、生命の独自の「体制」が有する同一性を際だてる。ここにインヴァーゲンの「生命」概念のルーツがある。

とはいえ、エイヤーズ²が指摘するように、確かにロックの場合も、ライプニッツとの関連で問題となるように、生命の運動が、動物では体制の形成と同時に始まる点が機械の場合と異なり、その理由がその運動が内部から来る点にあるとされるにもかかわらず、あくまでそれが「単一の機械的な生命システム」の機械論的モデルであること、また、その限りでは生命はものの「偶有性 accident」にとどまることを確認することができる。

¹ライプニッツの「モノドロジー」に関する論文でも知られる M.Furth の解釈が指示される。

²Ayers.M., 1991 *Locke Epistemology and Ontology*. London.

他方、ライプニッツの場合も、実は自然哲学の基盤のひとつが粒子論にあったが、二つのダイヤモンドを嵌め込んで作った「ひとつ」の指輪の例のように、諸部分の偶有的「寄せ集め aggregatum」としての物体を「生きた身体」と部分・全体関係 特に部分と全体の存在論的な先後関係 の観点からどのように存在として区別するかという問題があった。大きく言えば、「ライプニッツのメレオロジー」には、「連続体合成の迷宮」脱出のため、数学の「無限小」や無限分割される線分の存在論上の位置づけの問題も含まれ、部分が全体に先行する現実的「物体」、全体が部分に先行する可能的な「幾何学的存在」、合成に先行する精神的かつ現実的「モナド」の存在論的三分法の構図が見いだされるが³、生きた身体は、この図式に居心地の悪い問題を提起する。ライプニッツの場合も、動物や人間の身体が変化し、分割されうる「寄せ集め」と見なされる一方、身体が変化と時間を貫く持続的・「実体的」同一性をもつ点を存在論的にどう説明するかが課題だったのである。

ライプニッツは、ロックに対抗して、『人間知性論』（1705年執筆完了）では生命独自の体制を個体として存続させる精神的原理として「モナド」を導入する。これはアルノー宛書簡で復権が試みられた「実体形相」の概念を引き継ぐ。そこで本発表ではアルノー宛書簡の議論を紹介し、ライプニッツ流の「実体形相」の概念の特徴を導き出す。つまり、ライプニッツ固有の、個体の完全概念、独特の「記憶」概念などとの連関を示し、「実体形相」が現代生物学で問題となる「情報」や「プログラム」の概念と親近性もつ点を確認する⁴。この観点から「実体形相」の存在意義を描き出すことも発表の課題である。

以上のような考察から、身体ないし生物に関する「時間を貫くものの同一性」の問題について、いわゆる「テセウスの船」のパズルに関連し、「生命」に同一性の根拠を求める、インワーゲン、ロックと「実体形相」について語る、ライプニッツの違いを特徴づける。発表者は「実体形相」に関するライプニッツの洞察が現代の科学と哲学の地平でもちうる積極的意義を限り引き出したいと考える。とはいえ、この比較考察の結果を顧みるとき、いかに物質的とはいえ、「生命」に特別な地位を与えるインワーゲンは、中途半端であるという批評が、さらに、ライプニッツは、物質に還元できない異質なものを導入する「時代錯誤の」極端な論者であるという批判が当然ありうる。これに対して発表者は、両者は生物を可能な限り「自然化」する一方で、「生命」あるいは「身体」の範疇が存在論的な「原始性」をもつ点を主張した点を積極的に評価したい。

³この点は松田毅「現代形而上学とライプニッツ」『ライプニッツ読本』法政大学出版局、酒井潔・佐々木能章編 2012年 pp.323-334で論じた。

⁴ライプニッツの生物学とその哲学については Smith.J.2011 *Divine Machine, Leibniz and the Sciences of Life*. Princeton univ.Press.の優れた研究が出たばかりである。

3. 再びヴァン・インワーゲン：合成に関する「普遍主義」論駁をめぐって

最後に、ライプニッツの「実体形相」に関する諸概念が当時の生物学的研究と不可分であった点を再確認し、同じ構図がインワーゲンにも見られる点を指摘する。つまり、形而上学的考察と科学（生命科学）の連動（ないし循環）が、インワーゲンによる『物質的存在』での合成に関する「普遍主義」反駁の論証にも見られる点を指摘する。

インワーゲンの言う「普遍主義」は、何か対象が集められたとき、それだけですでに必ず合成が存在することを主張するものであり、形式的には「(複数量子) x_s が合成する何かあるもの something が産出されることは不可能である。なぜならば、(もし x_s が分離している場合) その何かあるものは必然的に x_s が合成するものだからである」(Inwagen.74) と定式化される。この表現は説明が必要であるが、インワーゲンの主張は明確である。つまり、集合論によれば、この x_s が抽象的であれ、具体的であれ、それらが存在する限り、それらは自動的に集合を産み出すのであり、これを強く表現すると、「どんな複数の対象も和をもつ、とする超普遍主義」になるが、この立場に立つと、十分に一般的な「部分」の概念をもつことができない、とインワーゲンが述べるからである。たとえば、青色、C シャープと私とからなる集合の場合、その部分と全体にどのような意味があるか分からない、と言えるからである。

インワーゲンは、普遍主義を論駁し、合成の原理として「生命」に意義があると考え。ただし、インワーゲン自身が認めているように、多くの哲学者が普遍主義を認めているので、立ち入った検討が必要となるだろう。ちなみにインワーゲンによる「普遍主義」反駁の論証は以下のようなものである。つまり、以下の五つの諸前提と普遍主義を正しいとしたときの帰結(F)から導かれる合成の不可能という不合理から、普遍主義の仮定を退けるのである。

(A) 私は今存在し、10年前にも存在していた。

(B) 私は(生物学的な意味で)有機体であり、また、つねに有機体であった。

(C) すべての有機体は、その存在のどの瞬間も原子から合成されている。

(D) 10年前に存在した有機体について考えよ。それを10年前に合成したすべての原子が今も存在する。

(E) 今存在し、10年前にも存在していた有機体について考えよ。その有機体を今合成している原子は10年前にそれを合成していた原子ではひとつもない。

(F) もし普遍主義が正しいならば、 x_s はけっして二つの対象を合成できないだろう。つまり、 x_s は同時的にも継起的にも二つの対象を合成できない。もっと形式的に言えば、もし

普遍主義が正しいならば、 y z w v (x_s が y を瞬間 w に合成し、かつ x_s が z を瞬間 v に合成し、かつ y と z は同じではないこと) が不可能となるだろう。

このうち、(C) (D) (E)は経験的事実を表わすが、(A) (B)は幾つかの理由で否定されうる。それは、時間を貫いて存在する自我や対象の存在を否定する四次元主義のような立場があるからである。しかし、インヴァーゲン(B)を擁護する。もちろん、これを認めない立場があるが、インワーゲンは、論証の制約条件として最初に「三次元主義」を採用すると表明しており、物質的存在としての「私の身体」は、部分も変化し、時間の推移とともに変化するが、時間を貫いて耐続するという立場を取る。実は、この点では、身体を「テセウスの船」になぞらえるライブニッツも、人間や動物について「三次元主義者」なのである。

ここで普遍主義を仮定し、10年前に私を合成していた原子を考える。そうすると、時間的に離れていても、その原子は今私を必然的に合成するものでなくてはならない。しかし、(E)より、それらの原子が今私を合成していないことは経験的な事実である。したがって、普遍主義は偽である。要は、普遍主義の主張を認めれば、時間的に離れている場合も、 x_s (w での原子と v での原子の指示対象は異なるはずである) が必然的にそれを合成する何かが存在することになるが、これは経験的・科学的事実(E)と両立しない。以上が、インワーゲンの反駁である。この論証は、普遍主義を採用しない場合、(E)のように部分が全部入れ替わっても、(B)のように有機体の耐続を認める「三次元主義」が可能であるためには何かが必要であることを導く。それが、「特殊合成問題」の回答として、 y を合成する「生命」なのである。

このように論証は、普遍主義の仮定からの演繹を事実に基づき反駁する形になっている。ただしインワーゲンの考察は、合成の原則として「生命」を「原始概念」として確保する一方、「生命」の特徴である「活動性」を様々なモデル、「つねに新しいメンバーが連れてこられるクラブ」や自己を自律的に維持する構造などで苦労して特徴づけようとするものの、「発生」や「自己複製」などの生命的現象を念頭におくと、生きた身体の部分・全体関係をまだ十分には分節化していないと言える面がある。

インワーゲンも、生化学的要素は「生きたシステムに捉えられ、ひとつの全体の部分となる」と述べるヤングや生きた有機体の形式を支持・維持する活動の動力源は構造に「内在する部分」であるとする、ミラーのような科学者から学び、変化する部分と論理的には区別される「システム」にまで迫っているが、この点では、「情報」や「プログラム」という物質に完全には還元されない、古い言い方では「精神的」要因を含む、ライブニッツの「実体形相」のモデルにも「身体のメレオロジー」あるいは「心的生命」に関する存在論のための可能性がある」と発表者は考える。